

不思議な人 中山英一郎

日高 敏隆*

思いもかけずこんなふうに分れてしまうことになってみると、ぼくは中山さんをずいぶん前から知っていたのだということにあらためて気づく。

あれはもう20年近く前になるのだろうか。分析化学の大御所藤永太一郎先生が創られた京大理学部の機器分析センターというところで、中山さんに会った。そのとき中山さんのあの若いような若くないような顔が妙に印象的だった。

それから中山さんとは奇妙なところばかりで、しかもいつも偶然に出くわした。

その一つは吉田山中腹の呑み屋“白樺”。京大全共斗の巣窟みたいだったここに、ぼくは農工大全共斗の学生だった人に連れられていった。そこに中山さんがいた。

この人、そういう人だったのかとぼくは思ったが、中山さんがぼくをどう思っていたかはついに聞かずじまいになってしまった。

“白樺”の主の高瀬泰司がガンで逝ったその葬儀のときや、その後の白樺での会のときも、そこにはいつも中山さんの姿があった。

もう一つは河原町今出川のエスポワール。三条古門前（ふるもんぜん）の料亭富の井を去ってこのお店を開いた高山輝久子さんを慕って、ぼくもときどきエスポワールを訪れた。

ここでもぼくは中山さんによく出会った。だが互いに、“どうしてここへ？”などということは聞かなかった。

そのような何年かが経ち、ある日突然、輝久子さんはエスポワールを閉めることになった。それからしばらくの間、ぼくにとって輝久子さんは、“元気にしているそうですよ”と人づてに聞く存在になってしまった。

そのころぼくは京大を定年退官し、新設された滋賀県立大学の学長になっていた。中山さんも海洋化学の専門家としてここにこられ、ぼくらは県大でしばしば会って学問の話をした。その中山さんから突然に、輝久子さんの結婚を知らされ、その記念シンポジウムとやらに招かれたのである。もちろん中山さんはその仕切屋としてそこにいた。驚きであった。

もうおとしの県大学祭（湖風祭）のときである。中山さんは“多発性脳梗塞とやらでね”といいながら、相変わらず酒のグラスを手にしていた。

思えば不思議な人である。ぼくは今、とても淋しい。ただ万感をこめて彼の冥福を祈るばかりである。

*) 滋賀県立大学前学長、国立・総合地球環境学研究所所長